2020年11月1日発行（毎月1回1日発行）第20巻第11号（通巻242号）2001年5月11日第三種郵便物承認

供養業界のためのビジネス情報誌

月刊仏事

11
2020 November
vol.242

●最先端樹木葬墓地を訪ねる　ハピネスパーク千年オリーブの森
菱形の幾何学模様が連なる樹木葬専門霊園

●withコロナの時代に生き残る葬祭会館　SASSOU株式会社
小規模な家族葬に適した「コンビニ転用型」会館

●コロナ禍におけるお葬式の実態調査
自粛による最小規模の葬儀は、緊急事態宣言下のピーク時と比較して緩やかに

●『葬祭業経営戦略セミナー2020』開催レポート
Withコロナ時代に日本の葬儀業界のトップランナーはどのように戦略を描いていくのか？

●鳴本石材株式会社　コロナに負けない！石屋さん応援オンラインセミナー
全国の元気な石屋さん　コロナ禍のピンチをチャンスに！Withコロナ時代の新営業スタイル！

●仏壇特集インタビュー　プロダクトデザイナー　清水 慶太さん
仏壇仏具業界の外にいる第三者的な目線で様式や宗教にとらわれない仏壇をつくりたい

「コンビニ転用型」会館の一例（SASSOU 株式会社）

「新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方 及びその疑いがある方の処置、搬送、葬儀、火葬等 に関するガイドライン」

葬儀関係者に求められる役割と感染防止対策 その2

令和２年７月29日、厚生労働省及び経済産業省から「新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方及びその疑いがある方の処置、搬送、葬儀、火葬等 に関するガイドライン」が発表された。ガイドラインは関係者の安全・安心だけでなく、亡くなった方の最期の場面における尊厳を守ることや遺族の感情に配慮しているのが特徴的である。

今回は新型コロナウイルスで亡くなった方のご遺体を収容する非透過性納体袋を製造・販売する有限会社川尻工業の代表取締役 川尻祥明氏に話を聞き、非透過性納体袋の信頼性や取り扱いの注意点について話を伺った。

志村けんさんの報道で注文が殺到

貴社の透明な非透過性納体袋は主にどのような時に使用されていましたか？

弊社の納体袋は損傷が激しいご遺体や、薬品事故で亡くなられた方のご遺体を収容するのに使われるものです。非透過性の納体袋に収容しないと、体液や化学薬品が周囲に付着してしまったり、有毒ガスが漏れるといった危険があるからです。また、警察で監察医の先生が検体する際に、中が見えないといけないので、透明に作られています。

注文が集中し始めたのはいつころからですか？

国内でコロナウイルスが流行り始めたのが２月上旬でした。さっぽろ雪まつりが感染拡大や集団感染のきっかけとなった可能性があるとも言われて、その頃から、新型コロナウイルスによる死者が出始めました。北海道にある弊社には、非透過性納体袋が欲しいというご依頼が、かなり早い段階でありました。

しかし、一番影響が大きかったのは、新型コロナウイルスによる肺炎で、志村けんさんが亡くなられた時です。ご遺体はすぐに火葬され、ご遺族は対面することも、骨を拾うこともできなかったというニュースが大々的に報道されて、顔が見える非透過性納体袋が欲しいと全国から注文が殺到しました。

その頃は問い合わせだけでも１日400件以上いただき、毎日200枚以上出荷していました。非透過性納体袋のメーカーは国内に二社しかありません。もう一社の方は、生産が間に合わないということになり、弊社に注文が集中しました。

例年であれば年間50枚程度、売れるか売れないかの商品です。弊社でも一時は生産が追いつかない状態でした。

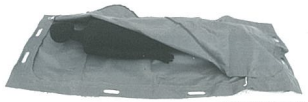
病院と自治体に集中して製品を出荷

どのように対処されたのでしょうか？

新型コロナウイルスで亡くなった方は24時間以内に火葬されるということだったので、透明な非透過性納体袋への需要がこれほど殺到するとは正直考えていませんでした。

問い合わせは病院や自治体、民間の業者など多岐に渡りました。特に市役所は全国から問い合わせがありました。テレビでクラスターが発生したというニュースが報じられると、その町の市役所から注文の電話がかかってきました。市役所は感染者が出た時点で、病院とやり取りをして、状況次第で納体袋を病院におくるという対応をしているようです。

問い合わせが殺到し、状況が逼迫していたので、民間の業者に売るのをやめて、病院と自治体からの注文に特化することで、必要数を必要な場所へ届けることができました。


遺体移送担架

© Kawajiri Industry Inc.
遺体袋 グレー（ITU 型）

© Kawajiri Industry Inc.
非透過性納体袋 透明（ITU 型）

© Kawajiri Industry Inc.
遺体覆いシート グレー（TSG 型）

実用新案登録証
技術評価書「6」を取得

民間の業者では、葬儀用品の問屋さんからの問い合わせが一番多かったです。ただ、問屋さんが在庫を抱えてしまうと、今すぐ必要な先へ数が行き渡らないと考え、問屋さんへの販売は制限させていただきました。在庫になるなら、その分必要な人に早く渡してあげたいと考えたからです。

枚数についても、なるべく先方の要望の枚数をお渡ししていますが、極端に多い枚数はお断りしています。従業員では、なかなか枚数交渉が難しいので、まずは私が対応して、欲しいという人の状況を確認しながら、枚数を交渉しました。

感染症のエキスパートの実績に裏付けされた製品

貴社の非透過性納体袋の特徴を教えてください

弊社の非透過性納体袋は実用新案技術評価書の技術評価で最高位の「6」を取得している信頼性のある製品です。ジッパー構造ですので、絶対に漏れない自信があります。ファスナー構造のものはもちろん、ジッパー（チャック）構造でスライダーが付いている製品はかなりの確率で漏れると言っていいでしょう。

ファスナー構造やスライダー（チャック）付きジッパー構造のもののほうが扱いやすいと、安易に選んでしまうと、体液などが漏洩して感染する危険があります。実際に他社の非透過性納体袋を使って、葬儀社の人が感染したケースも数件あるそうです。

大きさについても他社製品より、やや細めに作られています。これは死後にCT撮影で、撮影用ベッドに載せた時に、非透過性納体袋が撮影のスライド時に引っかかり破れる恐れがあるためです。その破れのリスクを無くするために、細く製作しています。これは弊社が長年、死体管理や感染症管理において培ってきた技術によるものです。

さらに、梱包用で使われているOPPテープを使い目張りすることで、透明性を有して密着及び密閉を保つことや、不意に開いてしまう危険性を完全に抑えることができます。

最近では非透過性納体袋の模造品なども出回っているようです。模造品は、弊社が使う再生塩化ビニールの代わりに、国際使用禁止物質などが使用されていることもあります。本物の再生塩化ビニールでなければ、強度が保てずに、感染性病原菌などがご遺体から飛散し汚染を引き起こしてしまいます。模造品や類似品にまどわされず、安全なものをご利用ください。

弊社は、警察の鑑識や解剖に使う機器などを専門に扱ってきました。弊社の従業員は感染症についての知識を持っているので、ただ販売するだけではなく、こうしたら感染しませんよという内容まで、きちんと説明することができます。お客様からは、値段もほかのところより安いし、使いやすいといわれています。

現在の注文状況はいかがでしょうか

今のところ、北海道の方は比較的落ち着いていますが、東京などでは若い人がコロナで重症化しているケースもあり、まだまだ油断はできません。これからウイルスが活性化する季節になりますし、海外からの渡航制限も緩和してきているので、また拡大が懸念されています。春先のパンデミック以上にはならないと思いますが、必要数をすぐに届けられるように弊社も万全の体制で備えています。

非透過性納体袋への取り扱いと注意点

非透過性納体袋へのご遺体の収容は、医療関係者が行います。収容・密閉後に袋の外側を消毒すれば、ご遺体からの感染リスクは極めて少なくなります。ただし、搬送中に袋が破損してしまったり、葬儀などで非透過性納体袋を開封しなければならない場合もあります。非透過性納体袋の取り扱い手順と注意点についてご説明します。

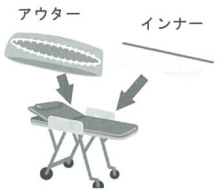
＜非透過性納体袋とは＞

「非透過性」とは、液体が浸透しないという意味です。厚生労働省はご遺体の搬送などに際し、チャックで密閉するこうした非透過性納体袋の使用を推奨しています。さらに、ガイドラインでは、ご遺族の方の心情や、遺体識別の観点から、少なくとも顔の部分が透明な非透過性納体袋が望ましいと明記しています。

手順 ご遺体を非透過性納体袋に収納する手順を紹介します。

① 作業者は個人防護具（サージカルマスク、手袋、長袖ガウン、フェースシールドまたはゴーグル）を着用します。

② 非透過性納体袋のアウターを開いた状態でストレッチャーにかぶせます。



③ 非透過性納体袋のインナーを開いて、アウターの上に置きます。

④ ストレッチャーの高さを作業しやすい高さに調整し、遺体をインナーに収容します。

⑤ インナーのチャックをしっかりと閉じから、チャックなどインナーの外側を清拭消毒します。

⑥ アウターのチャックをしっかりと閉じて、チャックなどアウターの外側を清拭消毒します。

⑦ 非透過性納体袋以外にも、ストレッチャーなど体液等が付着した可能性のある箇所は清拭消毒してください。

⑧ 作業後は石鹸と流水による手洗いを徹底してください。

●注意点

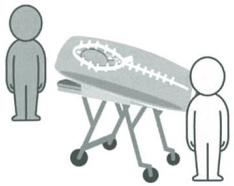
・遺体を冷却するためにドライアイスを非透過性納体袋にいれるときは、ドライアイスを非密閉性のもので包み、直接非透過性納体袋にふれないように注意してください。

・チャックの周囲等の素材が布である場合はそこから体液等が染み出るリスクはゼロではないため、納体袋を使用する場合は、布製の部分を止水テープで止めてください。

・適切な方法で非透過性納体袋に入れることで、遺体からの感染リスクは極めて低くなるものの、破損により体液等が漏れだす恐れが生じるため、取り扱いには十分注意してください。

●透明ではない非透過性納体袋を使用する場合

透明ではない非透過性納体袋を使用する場合は、上半身に透明なビニール袋をかぶせて、足元からチャックを閉めて、顔のところで閉じます。ビニール袋と非透過性納体袋の隙間を止水テープで密閉することで代用します。



最後に

新型コロナウイルス感染症の拡大状況を鑑みると、感染症の有無にかかわらず、今後の日常では、常に手指衛生や個人防護具の着用を徹底し、感染リスクを減少させる予防策が必要と言えます。また、人から人への感染を防止するため、三密を避け、お互いにマスクをして人との距離（可能な限り 2m）を意識し、部屋の換気をよくする等、一般的な感染対策を行うことが求められています。

新型コロナウイルス感染症で家族を亡くすと、実感が持てないままに火葬まで行われるため、気持ちの整理をつけるのが難しい状況です。亡くなってから火葬までの一連の儀式は、亡くなられた人だけではなく、残された家族のためのものでもあります。

ガイドラインでは、非透過性納体袋に破損がなければ、火葬における遺体からの感染リスクはほとんどないと記載されています。火葬の前に、通夜や葬儀を執り行う際に非透過性納体袋越しに故人のお顔を見てもらう場を設けることについても、前向きに検討してほしいという方針です。

新型コロナウイルス感染症で亡くなったのだから仕方ないと考えずに、感染拡大には留意しつつ遺族の気持ちによりそうことが、新しい時代の葬儀業に求められているのではないでしょうか。

ガイドラインの全文は、厚生労働省及び経済産業省のホームページで閲覧可能です。ご確認の上感染防止対策にお役立てください。

https://www.mhlw.go.jp/content/000653447.pdf